

朝日歌壇



〈日曜日のプローチ 35〉 junaida

◆長谷川 權選

戦死者の一覧のぞく寒さかな
薪一本世界の終の姿かな
旅の神踏みどころなしガザの街
じじだけで通する世界小鳥来る
ゆるぎなく六腑ありけり日向ぼこ
☆重力を一気に使ひ鷹降る
冬の月車窓に頼つければ見ゆ
逆光の捕手に投げ込む冬野かな
葉臭の体さうして日向ぼこ
父母の腕かいくべり七五三

(高山市) 直井 照男
(長野県信濃町) 渡邊 春乃
(箕面市) 櫻井 宗和
(生駒市) 小田原久美子
(静岡市) 山本 正幸
(静岡市) 松村 史基
(大野城市) 野分 のわ
(千葉市) 團野 耕一
(大垣市) 大井 公夫
(榑原市) 佐藤 雅之

【評】一席。何であれ名簿は寒々としている。戦死者であればなお。二席。世界の終末は一本の薪。その恐ろしさ、そしてすがすがしさ。三席。破壊され尽くした街。旅ゆく神の足の踏み場もない。十句目。大きな木のように。かわいいいさかり。

◆大串 章選

傘寿から卒寿を目指し日向ぼこ
初時雨生涯現役達矢近く
初雪や出口ひとつの無人駅
立冬や年を重ねて足るを知る
働かぬ勤労感謝の日寂し
雲もまた旅を急ぐのか夕枯野
熱燗が夢の続きを語らせる
ペチカ燃ゆむかし歌声喫茶あり
平等院へ急ぐ宇治橋初時雨
新米と文字不揃ひの母の文

(新宮市) 中西 洋
(相模原市) 新垣 豊太
(奈良市) 浦城 亮祐
(深谷市) 足立 弘
(市川市) をがはまなぶ
(東京都世田谷区) 吉野 新一
(松山市) 西本 千尋
(越谷市) 新井高四郎
(青森市) 天重 光宏
(蓮田市) 川島 和夫

【評】第1句。身も心も暖まる日向ぼこ、「傘寿から卒寿を目指し」が素晴らしい。第2句。生涯現役を貫いた仲代達矢が今年11月8日に急逝（92歳）。朝日俳壇にも多くの追悼句が寄せられた。第3句。「しぐるゝや駅に西口東口 安住敦」を思う。

◆高山れおな選

熊べに入らずいけないものを見る
無牛の眼きんいろ神の留守
☆重力を一気に使ひ鷹降る
冬されの孤や乾坤を呑む欠伸
冬うらら「しかし」と心つぶやけり
空還かメタセコイアの落葉道
なきがほのやうな熊ある民の中
もっ少し寝ようか勤労感謝の日
金屏の屈折しつづつ光りつづつ
スケッチブックに山茶花残し逝きし妻

(東京都世田谷区) 野上 卓
(大和市) 窪田 恭子
(静岡市) 松村 史基
(船橋市) 齊木 直哉
(川崎市) 丸田 征男
(東京都世田谷区) 永井 和子
(水戸市) 久信田史夫
(越谷市) 安居院半樹
(相模原市) はやし 央
(高萩市) 小林 紀彦

【評】野上さん。「いけないもの」だらけの世界をさまよう飢えた熊。とぼけた調子のうちに、言葉にならない思いが溢れる。窪田さん。いずこかの天満宮の社頭風景。的確な写生。松村さん。獲物に向かって急降下。「一気に使ひ」が力強い。

◆小林 貴子選

天職を知らず勤労感謝の日
勤労感謝の日専業主夫と独り言つ
氣立よき山に囲まれ冬に入る
ミヤクミヤクの魅力向上実万両
数ふるも何かあやふやと鳩
焼芋が好き世話焼きはもつと好き
空風や皿が主役のレストラン
見上げれば今日を生きよと皇帝ダリア
黒きコートに裏地を君に見せたくて
亡き母の祈る姿も報恩譚

(横浜市) 吉野 暢
(横浜市) 座間 敏正
(鳥取県大山町) 表 いさお
(京都市) 室 達朗
(防府市) 来栖 章子
(川崎市) 小澤 弘一
(藤沢市) 一色 伽文
(大和市) 澤田 睦子
(東京都中野区) 東 賢三郎

【評】一句目、自分で「これぞ天職」と思えば幸せだが、そういう人は少なそう。二句目、専業主夫・婦の皆さんおつかれさまです。三句目、「氣立よき山」の存在にほっこりさせられる。四句目、博覧会の終了後に評価するところが面白い。

うたをよむ 移民の歌

千種 創一

最も古い移民の歌はこの歌であらう。天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも 阿倍仲麻呂
仲麻呂は唐へ渡り、官僚として活躍した。時代は下り、大正期にブラジルへ渡った歌人の、同じく望郷を主題にした、ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永久に思はむ 岩波菊治
との歌もある。明治以降、多くの日本人が海外へ移住して、多くの歌を詠んできている。移民を考えると、職や知識を

求めた日本人たちを受け入れてきてくれた諸国の人々のことを忘れたくない。令和に入り、海外からの移民を詠む歌も増えたように感じる。
ベトナム人実習生の鼻歌はひびくカメラの外の世界で 霧島あきら
霧島の歌は、短歌研究新人賞の連作の一首だが、同連作の主題は移民ではなく職場だ。日常の風景として移民が登場する。今後 移民を詠む歌は増えるだろうが、一方的な眼差しで詠むのではなく、

相手の文化も理解した上で詠みたい。創作が誰かを傷つけることのないように。今夏名古屋で開催された短歌大会「短歌部@なごや」でこんな歌が入賞した。かなしいとかわきしいってかわのひとはなしまししょうしあわせになる ダン ティ ニュン
川岸に行くとき会える人を「かわのひと」と呼ぶ不思議さ。氏名からしてベトナムに出自を持つ方だろうか。僕も選考委員を務めたが、無記名選考で、純粹に歌自体が評価された。今後、日本語を母語としない人々の歌も増えるだろう。それはきつと短歌の世界を豊かにする。(歌人)

風 信
奥田亡羊全集「ほろんじ」 著者が4月に亡くなる直前までの作品を収めた第4歌集「虚国」と、「亡羊」「男歌男」「花」を収録した全集。(書肆侃侃房・2310円)
永井祐訳・正岡子規著「歌よみに与ふる書」「伝説の書」を1981年生まれの歌人が現代語に訳し、解説した。読者からの質問に対する子規の解答や原文も収録。(左右社・2420円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選考が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。ネットから投稿する場合は「朝日歌壇」の投稿フォームから。